

第12回野菜需給・価格情報委員会の概要

1 日時

平成24年3月12日（月）14:00～16:00

2 場所

独立行政法人農畜産業振興機構 北館6階大会議室

3 概要

(1) 秋冬野菜の需給・価格の状況（資料1）の説明

- ・冬キャベツは、11月から12月上旬にかけて入荷量が増加し、価格が前年に比べ大幅に下落した場面もあったが、入荷量は前年をかなり上回り、価格は前年をかなり下回って推移した。
- ・秋冬だいこんは、11月に入荷が増加し、価格が前年に比べ大幅に下落した場面もあったが、入荷量は前年並み、価格は前年をやや上回って推移した。
- ・たまねぎは、入荷量は前年をかなり上回り、価格は高値だった前年を大幅に下回った。
- ・冬にんじんは、千葉産の出荷が順調であり、入荷量は不作であった前年をかなり上回り、価格は高値であった前年を大幅に下回って推移した。
- ・秋冬はくさいは、11月から12月は気温が高く鍋物需要が減退したこと等から価格が前年を大幅に下回り、1月以降は、入荷量が前年を上回ったものの、価格は前年をかなり上回った。全体としては、入荷量は前年同、価格は前年を下回った。
- ・冬レタスは、11月は好天の影響で入荷量が前年を大幅に上回り、価格は大幅に下回り、12月以降は入荷が減少し高値になる場面があった。全体としては、入荷量は前年をやや上回り、価格は前年を大幅に上回った。

(2) 秋冬野菜の需給・価格の見通しに関する意見交換

① 消費分科会における需要・消費等に係る意見の報告

ア 景気、天候などの要因による消費動向

- ・11月及び12月前半の気温が高かったことによる前進出荷に加えて、その後の寒波等の影響により市場への入荷量が減少し、価格が高値となった。小売においては、単価が上がったため金額ベースでは好調であったが、数量ベースでは減少した。
- ・景気が減退している中で、価格が一定で、食べ残し等の無駄の少ないカット野菜が伸びている。
- ・カット野菜の提供においては、原料となるキャベツやレタスが天候不順で品質が悪く、歩留まりが悪い中で価格を変更せずに販売しているので、供給事業者はかなり苦労している。

イ 震災、原発事故の影響による消費動向

- ・冬場の産地は、関東より西が中心であることから、影響はほとんどなかった。
- ・寒い時期には鍋物需要で通常売れるしいたげが伸びていないが、これは一部地域の原木しいたげが出荷制限となっている影響ではないか。他のきのこの販売は通常どおりである。

ウ 野菜全体の販売状況

- ・カット野菜を含めて加工・業務用のウエイトが急激に伸びている。

- ・カット野菜の消費は、価格が一定であることからだけではなく、高齢者世帯や独身世帯の増加等を背景に簡便性を求める消費者のニーズにも合致し、従来以上に大幅に増加し、家計消費にも浸透してきている。

- ・野菜は198円を超えると極端に販売量が減少する傾向にある。

- ・通常1/4カットしているものをさらに1/6、1/8カットにしたり、鍋物用にざく切りにしたりして、商品を小口化している。

エ 全体(主要6品目)の傾向

- ・冬場は、西南暖地を中心とした西の産地の野菜が多かったが、春から夏にかけては原発事故の影響を心配する関東以北の産地が主流となり、消費者の反応が心配。数量確保の難しさやコスト高となるデメリットはあるが、消費者ストレス緩和のため西の産地との併売を行わざるを得ないのではないかと。

- ・昨年は東日本大震災後の自粛ムードから、花見需要やレジャーを見込んだ販売戦略を打つことができなかった。今年は弁当、惣菜等を含めて春の食材を積極的に販売したい。

オ 春キャベツ

- ・価格高騰によるカット野菜へのシフトのみならず、簡便さが受けており、今春の販売にも期待がもてる。カット業者の技術向上も寄与している。

カ 春だいこん

- ・冬が旬の食材だが、最近では春でも「す」の入らない品種ができており、春でもおいしい食材として販売していきたい。

キ たまねぎ

- ・春以降、兵庫産・佐賀産の柔らかい新たまねぎが出回る時期となる。品種にあわせた食べ方の提案も含めて積極的に販売していきたい。

ク 春夏にんじん

- ・直近の販売状況は思わしくない状況であったが、春以降は、徳島産・鹿児島産の新ものへの消費者の反応に期待している。

ケ 春はくさい

- ・最近では黄芯系のはくさいが人気であるが、白芯系のはくさいも甘みがあっておいしい。春以降は、需要が減少する傾向にあるが、品種に合った食べ方を提案しつつ販売することが必要である。

コ 春レタス

- ・加工・業務用では、不作になると歩留りが悪化する。歩留りが良いアメリカ産の輸入を継続する動きもみられる。

サ その他

- ・気象変動等により野菜の生理障害が増え、歩留まりの低下にもつながっている。すべて廃棄するのではなく、可食部分は商品にするような取り組みが必要。

- ・カット野菜が伸びている一方で、生産が厳しい状況が続く産地が疲弊してしまっている現状がある。このままでは、加工・業務用の産地がつぶれてしまうのではと危惧している。加工・業務用需要が伸びている中で、加工用産地の育成が今後の大きな課題。

- ・加工用たまねぎについては、国産の供給状況に応じて輸入をさらに拡大することを検討。
- ・消費拡大を行うためには「簡便性」と「機能性」がキーワードになる。その場合、野菜の機能性については、一時的な情報に惑わされることがないように「医食農連携」を確立し、医学的エビデンスをしっかりと構築することが必要。
- ・若年層においては、特に調理をしない傾向があり鍋物用具材がセットになった「野菜キット」が伸びる傾向にある。
- ・これから昨年の中日本大震災を振り返るメディア報道等が増えるものと思われる。防災意識の高まりから、備蓄できる保存性の高い野菜が一時的に伸びるのではないかと。
- ・今後は60代～70代の「高齢・単身世帯」をターゲットにした販売戦略が必要と考えている。コンビニだけでなく、遠方のスーパーにも足を運んでもらうため、小量目化をさらに進めていくことが必要。
- ・食育は子供だけではなく、大学入学や社会人になるなど生活スタイルの変化があるタイミングで行うことが効果的ではないかと。

② 春野菜の各品目毎の見通し

ア 春キャベツ

(ア) 生産者側の報告

- ・作付面積は、千葉は前年比101%、神奈川は同96%、愛知は同90%。
- ・生育状況は、千葉は1月下旬以降の多雨・降雪・日照不足による定植作業の遅れ、低温による生育遅れが見られる。神奈川は12月以降の低温、干ばつにより生育が遅れている。愛知は年明けの低温干ばつにより冬・春系は小玉傾向。夏系はは種、定植ともに遅れが見られる。
- ・4月から6月までの主産3県の出荷見通しは、期間トータルで前年同、過去3か年平均比105%とかなり上回る。

(イ) 各委員の意見

- ・最近では単価が落ち着いてきており、キログラム当たり100円程度で推移するのではないかと。
- ・4月下旬からは各産地の出荷が重なり、入荷量が増えると価格が低くなる可能性がある。
- ・加工・業務用では、寒玉系が春系よりも重量が出るので、寒玉系の出荷が早く切り上げれば、韓国産、中国産にシフトする可能性がある。
- ・漬物メーカーは春系キャベツが需要期になり、量が必要である。

イ 春だいこん

(ア) 生産者側の報告

- ・作付面積は、千葉は前年比101%。長崎は同102%。
- ・生育状況は、千葉は12月中旬以降の低温及び1月下旬以降の日照不足により生育遅れ。長崎は年明け以降の低温・干ばつにより、若干の遅れが見られる。
- ・4月から6月までの主産2県の出荷見通しは、期間トータルで前年比98%、過去3か

年平均比103%とやや上回る。

(イ) 各委員の意見

- ・冬の低温・干ばつの影響により、入荷が少なく、相場高になっているが、4月以降は出荷も順調になり、価格は平年並みになる見込み。
- ・外食用では、今まではLー2Lサイズを納めていたが、最近は価格が高いため、切りだいを納めており、無駄がなく良いとの評価を得ている。
- ・加工・業務用では、中国産のだいを使用したところ、使えるとの評価がなされており、3～4月にかけて中国産の需要が増加してくるのではないかと。

ウ たまねぎ

(ア) 生産者側の報告

- ・作付面積は、北海道は前年比104%。佐賀は同98%、兵庫は同102%。
- ・生育状況は、北海道は種及び苗立ての作業の準備段階。佐賀は年末から年明けにかけての低温・乾燥により、中晩生については微減になる見込み。兵庫は定植作業は順調に進んだが、冬期の低温で昨年より若干草丈が低い傾向。
- ・4月から6月までの主産3県の出荷見通しは、期間トータルで前年比114%、過去3か年平均比107%とかなり上回る。

(イ) 各委員の意見

- ・ヨーロッパに輸出されていたニュージーランド産は、オランダが豊作のために日本向けの量が増加している。
- ・加工・業務用では、国内相場に左右されない中国産の割合が高まっており、貯蔵ものの切り上がりが早いと、輸入ものに移行する可能性がある。
- ・5月上旬頃に出荷が重なる可能性があり、価格は前年を下回る可能性があるが、全体としては前年並みの見込み。

エ 春夏にんじん

(ア) 生産者側の報告

- ・作付面積は、徳島は前年比103%、千葉は同99%。
- ・生育状況は、徳島は年明け以降の低温・干ばつにより、やや遅れ気味で推移。千葉は年内播きは順調だったが、年明け以降は低温、乾燥、降雪等によりは種作業が遅れている。12月中旬以降の寒波により生育も遅れている。
- ・4月から6月までの主産2県の出荷見通しは、期間トータルで前年同、過去3か年平均比102%とわずかに上回る。

(イ) 各委員の意見

- ・順調な出荷が見込まれることから、価格は平年並みと見込まれるが、5月下旬には各産地の出荷が重なり平年を下回る可能性。
- ・主産県との価格差から、九州産等の西南暖地への手当てが増える傾向にある。
- ・加工・業務用では、中国産から国産への回帰の動きもあるが、一方で価格面の有利性が

ら、中国産等の輸入ものへの移行も見られる。

オ 春はくさい

(ア) 生産者側の報告

- ・作付面積は、茨城は前年同、長野は前年比103%。
- ・生育状況は、茨城は早い作型のもの、生育期の低温・干ばつの影響により、遅れが生じている。晩生については現在定植中。長野はこれまでの低温傾向により、圃場準備が若干遅れているものの、作業が本格化するのは3月以降のため、全体への影響は少ない見込み。
- ・4月から6月までの主産2県の出荷見通しは、期間トータルで前年比106%、3か年平均比111%とかなり上回る。

(イ) 各委員の意見

- ・漬物用への手当のため、4月上旬に市場への出荷が減少し、価格が平年を上回る可能性があるが、4月下旬以降は入荷量が増加し、平年を下回る見込み。
- ・夏場の産地は6月から出荷が始まるが、8月の出荷のピークをずらして10月まで出荷を行う作型になっている。
- ・外食業界では、4月以降使用量がかかなり減少する中で、最近ではサラダ需要も出てきているが、小ぶりの品種や1/2カット等の提供にとどまっている。

カ 春レタス

(ア) 生産者側の報告

- ・作付面積は、茨城及び兵庫は前年同、長野は前年比101%。
- ・生育状況は、茨城は1月から2月にかけての干ばつ・低温により生育が遅れている。長野は降雪、低温の日が続き、全般に作業は遅れている状況。兵庫は低温・干ばつの影響から生育は遅れ気味であるが、最近の降雨で干ばつは解消の見込み
- ・4月から6月までの主産3県の出荷見通しは、期間トータルで前年比105%、3か年平均比104%とやや上回る。

(イ) 各委員の意見

- ・生育が遅れていた分の出荷が4月中・下旬以降に集中し、価格は前年を下回る見込み。
- ・価格高騰の影響を受け、加工・業務用では、国内産と品質差がない台湾産への需要が高まる傾向にある。
- ・加工・業務用で九州産の契約量が納められなかったため、市場から加工・業務用を購入したため価格が高騰した。

③ その他（カット野菜の需要増について）の意見

- ・野菜の価格が高いとカット野菜の需要が増加し、低いとカット野菜の需要が減少する関係は長い目で見ていかなければならない。
- ・昔から漬物は、野菜が高値の時に需要が増加し、安値となると需要が減少した。しかし、最

近は、野菜が高いとカット野菜を購入し、漬物を購入しなくなっている。

(3) 委員の意見を踏まえた春野菜の需給・価格の見通しの野菜需給協議会への報告

(2)の生産者側の報告及び各委員の意見等を藤島座長が取りまとめ、各委員に了承を得た上で、3月16日開催の第15回野菜需給協議会に以下のとおり報告することとなった。

ア 春キャベツの需給・価格の見通し

- ・作付面積は、千葉は前年並みと見込まれるが、神奈川及び愛知は前年を下回り、全体としては前年をやや下回る見込み。
- ・生育状況は、多雨、降雪及び日照不足による定植作業の遅れと低温及び干ばつによる生育遅れが見られ、小玉傾向。
- ・出荷量は、4月は前年並みで、5月は前年を上回るが、6月以降は前年をやや下回り、全体としては前年並みで、平年を上回る見込み。
- ・4月は前年並みの出荷が見込まれるものの、価格は震災等の影響で安値であった前年を上回ると見込まれるが、5月以降、価格は前年及び平年を下回る見込み。加工・業務用では、寒玉系の出荷が早めに終了すれば、中国産、韓国産の使用にシフトする可能性。

イ 春だいこんの需給・価格の見通し

- ・作付面積は、千葉、長崎ともに前年並みの見込み。
- ・生育状況は、低温、干ばつ等の影響により若干の遅れが見られる。
- ・出荷量は、4月から5月にかけては多かった前年をやや下回るものの、平年を上回り、6月は前年を上回るが平年を下回る見込み。全体としては多かった前年を下回るものの、平年をやや上回る見込み。
- ・価格は、4月以降平年並みと見込まれるが、6月は青森産への切替りの状況次第で価格が前年を上回る可能性もある。外食用では、価格が高いことから、切りだいこんを使用するケースも見られる。一方、加工・業務用では、中国産のだいこんを使用したところ、使えるとの評価がなされている。

ウ たまねぎの需給・価格の見通し

- ・作付面積は、北海道及び兵庫は前年を上回るが、佐賀が前年を下回り、全体として前年並みとなる見込み。
- ・生育状況は、年末から年明けにかけて低温及び乾燥により、佐賀の中晩生に影響が若干出ている。
- ・出荷量は、5月に前年をやや下回るものの、全体としては前年、平年ともに上回る見込み。
- ・5月上旬頃に出荷が重なる可能性があり、価格は前年を下回る可能性があるが、全体としては前年並みの見込み。国内産の加工・業務用への対応次第では、中国産の輸入が増加する可能性がある。

エ 春にんじんの需給・価格の見通し

- ・作付面積は、千葉ですいかからの品目転換が進んでいるものの、全体としては前年並みの見込み。

- ・生育状況は、低温、干ばつ及び降雪により、は種作業が遅れているうえに、寒波により生育も遅れ気味。
- ・出荷量は、多かった前年並みで、平年をやや上回る見込み。
- ・順調な出荷が見込まれることから、価格は平年並みと見込まれるが、5月下旬には平年を下回る可能性。主産地との価格差から、九州産への手当てが増える傾向にある。加工・業務用は、国産への回帰の動きもあるが、一方で価格面の有利性から、中国産等の輸入ものへの移行も見られる。

オ 春はくさいの需給・価格の見通し

- ・作付面積は、茨城は前年並み、長野は前年をやや上回り、全体としては前年をやや上回る見込み。
- ・生育状況は、茨城で低温及び干ばつにより遅れが生じている。
- ・出荷量は、気温がおおむね平年並みと予想されることから、前年を上回る見込み。
- ・漬物用への手当のため、4月上旬に市場への出荷が減少し、価格が平年を上回る可能性があるが、4月下旬以降は入荷量が増加し、平年を下回る見込み。外食業界では、4月以降使用量がかかなり減少する中で、最近ではサラダ需要も出てきているが、小ぶりの品種や1/2カット等の提供にとどまっている。

カ 春レタスの需給・価格の見通し

- ・作付面積は、茨城、長野、兵庫ともにほぼ前年並みの見込み。
- ・生育状況は、降雪及び低温により遅れが見られるが、今後の気温次第で回復の可能性あり。
- ・出荷量は、4月以降は前年及び平年を上回る見込み。
- ・生育が遅れていた分の出荷が4月中・下旬以降に集中し、価格は前年を下回る見込み。価格高騰の影響を受け、加工・業務用では、台湾産への需要が高まる傾向にある。

キ その他秋冬野菜全体の消費動向等

(ア) 景気、天候などの要因による消費動向

- ・11月及び12月前半の気温が高かったことによる前進出荷に加えて、その後の寒波等の影響により市場への入荷量が減少し、価格が高値となった。小売においては、単価が上がったため金額ベースでは好調であったが、数量ベースでは減少した。
- ・野菜の高値を背景に、価格が一定で、食べ残し等の無駄の少ないカット野菜が伸びている。

(イ) 震災、原発事故の影響による消費動向

- ・冬場の産地は、関東より西が中心であることから、一般の小売においては影響はほとんどなかった。
- ・加工・業務用では、一部地域を除いてほとんど抵抗がなくなってきているが、学校給食用においては依然として特定地域への抵抗感が存在している。
- ・4月から、放射性物質の規制値が引き下げられることに伴い、検査の費用について、誰が負担するかが課題。

(ウ) 野菜全体の販売状況

- ・カット野菜の消費は、簡便性を求める消費者のニーズにも合致し、家計消費においては従来以上に大幅に増加している。今後、価格動向との関係をより注視する必要。

- ・通常1/4カットしているものをさらに1/6、1/8カットにしたり、鍋物用にざく切りにしたりして、商品を小口化している。

(エ) 春野菜の消費動向

- ・冬場は、西南暖地を中心とした西の産地の野菜が多かったが、春から夏にかけては関東以北の産地が主流となり、原発事故の影響を心配する消費者の反応が心配。消費者ストレスの緩和のため、西の産地との併売を行う動きがある。

- ・昨年は東日本大震災後の自粛ムードから、花見需要やレジャーを見込んだ販売戦略を打つことができなかった。今年は弁当、惣菜等を含めて春の食材を積極的に販売する動きがある。

(オ) その他

- ・加工・業務用需要が伸びている中で、加工用産地の育成が今後の大きな課題。

- ・野菜の価格が高騰し、小売の段階ではカット野菜の販売量が増えた一方で、外食業界では、コスト削減のためにカット作業を内製化する傾向も見られる。

- ・消費拡大を行うためには「簡便性」と「機能性」がキーワードになる。その場合、野菜の機能性については、一時的な情報に惑わされないように「医食農連携」を確立し、医学的エビデンスをしっかりと構築することが必要。

- ・若年層においては、特に調理をしない傾向があり、鍋物用具材がセットになった「野菜キット」が伸びる傾向にある。

- ・今後は60代~70代の「高齢・単身世帯」をターゲットにした販売戦略が必要。コンビニだけでなく、遠方のスーパーにも足を運んでもらうため、小量目化をさらに進めていくことが必要。

- ・食育は子供だけではなく、大学入学時や社会人になる時期等生活スタイルの変化があるタイミングで行うことが効果的ではないか。